

ジュール・シオン地理学考

西村孝彦

I はじめに

ジュール・シオン (Jules Sion) は1879年に生まれ、1940年にこの世を去ったヴィクトリアン第一世代の地理学者で、今世紀前半のフランス地理学派を代表する人物の一人と考えられる。また彼はフランス国内だけでなく、イギリス、イタリア、アメリカ、日本をはじめ世界的にもその名の知られた著名な地理学者でもある。しかしその著名さに比べて、彼の思想そのものは必ずしもよく知られていたわけではなく、ことに没後はなんらかの人たちからとき折顧みられたことを除けば、地理学史の書物の中でも取り上げられることが少なく、たとえ言及されたとしても正当な席を与えられておらず¹⁾、どちらかといえばマージナルな位置に押し込められてきた人であった。

その理由はいくつか考えられる。たとえば彼が中央集権的なフランスにあって、パリではなく、モンペリエという南フランスの地方大学に在職していたこと、第2に、グルノーブルという同じ地方大学にありながら、ブランシャール (Blanchard, R.) の如くパリに対抗し得る《グルノーブル学派》²⁾ という一大勢力を形成していたことから推察すると、彼が研究者養成にそれほど力を注がなかったこと、そして第3に、そしてなによりも大きな理由と考えられるが、弟子をもたなかったということといえば、ブリュヌ (Brunhes, J.) やヴァロー (Vallaux, C.) も同じ立場にあり、結局シオンが、前二者のように³⁾、地理学論に関するまとまった書物を残さなかったこと、などが重要であるように思われる。

しかし彼が、たとえこのような書物を著さなかつ

たとしても、またたとえフランス地理学に大きな影響を与えなかったとしても、彼の思想が価値あるものであることに変わりはない。彼の様々な文章を読み返すとき、そこには現代地理学、とりわけ、今日我々が地理学の新たな道の1つをそこに求めようとしている《社会地理学》や《生きられる空間》の地理学、都市＝農村関係研究の前ぶれを感じさせる新鮮な地平が浮かび上がってくる。

ところで1960年代末頃から、ジュール・シオンの地理思想がわずかではあるが、いくつかの文献の中で取り上げられるようになっていく。バットィマー (Buttimer, A.) の書物の1章⁴⁾ やクラヴァル (Claval, P.) のいくつかの文献⁵⁾ の中に散見される文章がその例である。このことは、70年前後から現れ始めた経済地理学や計量地理学から人文主義地理学や社会地理学への関心の変化、という地理学全体の動きを反映しているものと思われる。筆者はフランス地理学の開拓者たちを系譜論的な側面から再読するという作業を、1つの関心としてすすめているが、本稿もこの作業の一貫をなすものである。以下では、いまだ筆者の個人的なメモの域を脱し得ず、その序章的な意味でしかないが、かかるジュール・シオンの人と業績についてその若干を整理してみることにする⁶⁾。

II ジュール・シオンの人と業績

(1) 経歴

ジュール・シオンは1879年9月6日、フランス北部ノール県の小さな町マスニーで生まれた。彼の父は、ノール県の南に接するパ・ド・カレー県の古都

アラスにある師範学校の校長を長らく勤めた人であった。幼い頃から地理に興味のあったシオンは、1899年フランス最高の学者・教育者養成機関である高等師範学校エコール・ノルマル・シュペリウールの文科に入学する。彼の同期生には、後に社会党議員となり、第一次世界大戦中には軍需大臣を勤めることになるアルベール・トマ（Albert Thomas）や、将来の《アナール学派》の総帥となるリュシアン・フェーヴル（Lucien Febvre）らがあり、1級上にはデュルケミアンとなるモーリス・アルブワックス（Maurice Halbwachs）がいた。とくにフェーヴルとは親交を深めていき、生涯の友となる。1929年の《経済社会史年報》の創刊に際しては地理学者として、また親友として様々な面での相談相手となり、その後も彼はつねにフェーヴルのよき協力者であり続けた。

フェーヴルの回想によると⁷⁾、学生時代のシオンは、勇猛果敢で、ボレミックなフェーヴルとは全く対照的に、物静かで、やや神経質な青年であったという。高等師範当時から、彼はその極端に洗練された知性と深い教養の持ち主として、学友からはつねに一目置かれていたそうで、当時の学生はそれぞれいくつかの渾名をもっていて、互いに様々な渾名で呼び合っていたのであるが、シオンだけはただ1つの渾名しか付けられていなかった。その渾名とは、すなわち《地理学者》であった。学生時代から自らの専攻をはっきり決めており、最初から完成された地理学者とみなされていた現れなのであろう。

1902年高等師範学校を卒業し、アグレガシオン試験をトマに次ぐ次席で合格した。その後、有名なティエール財団の奨学生に選ばれ、学位論文の準備にとりかかる。1908年主論文『東ノルマンディーの農民』⁸⁾と副論文『上ヴァール地方、自然地理学的研究』⁹⁾の2冊を書き上げ、パリ大学に提出し、文学博士号を得ている。その同じ年、西フランス、シャラント県のリセ・アングレーム校にはじめて職を得、翌09年にはパススラ（Passerat, Ch.）の後任とし

て、クレルモンフェラン大学に移る。そして1910年7月にモンペリエ大学に着任し、ここで終生教鞭をとることになる。モンペリエではそれまで地理学はあまり人気のある学科ではなかったが、この若き大学教授が着任して以来、年を追うごとに専攻生が増えていき、彼の講義は多くの受講生を集めたという。着任間もない時期に彼の講義を受講したシオンの一番弟子であるポール・マレス（Paul Marres）によると¹⁰⁾、彼の講義はそのプランといい、表現形式といい、明晰さといい、どれをとっても完璧で、問題点を見事に整理し、複雑なものを単純化するのに秀でていた。しかも地誌の講義では、つねにアップ・トゥー・デートな情報にもとづいて行われていたため、それだけ人気も高かったという。

なおモンペリエには、フランス植物生態学の創始者であるフラオー（Flahault, Ch.）がいた。彼とは1906年のフラオーによって組織されたラングドック地方での第2回全国大学総合地理学巡検の際¹¹⁾に知り合うようになり、モンペリエ着任後は同じ北フランス出身ということもあって、親交をさらに深めていったようである。ジンメルマン（Zimmermann, M.）によると、シオンの『イタリア』の植物景観の分析にはこのフラオーの影響がみられるという¹²⁾。

第一次世界大戦はひ弱な体質であったために兵役免除となったが、その代わり陸軍陸地測量部の地理委員会でギリシャ、イタリアに関する紹介記事を書く仕事に動員させられた。そのため当時作業をすすめていた『世界地理』の『モンスーン・アジア』の研究は中断を余儀なくされ、しかもそれまで収集していた資料類や、書きためていたノート類が保管されていたマスニーの両親の家が戦災に見舞われ、そのすべてを焼失するという不幸にあった。けれどそうした中でも、片時も教え子たちのことを忘れたことがなく、戦場へ行った学生たちに絶えず手紙を書き続け、戦後は復員学生のためや、アグレガシオン試験の受験生のために、私的なセミナーを開いたり

しており、彼の教育にかける情熱の強さの一面が窺われる。「彼〔シオン〕は人前に出てこないと非難されていた。彼は長談義を避けていた。仕事と思索の時間が奪われるからだ。彼は内気だと思われていた。全然。しかし彼は俗世間よりも心の仕事、様々な物事を深く省察することを好んでいた。……彼はからだか虚弱であったので、学生〔の指導〕と自分の研究活動に注ぎ込まなければならない時間を是が非でも守ろうとしていたのである」¹³⁾。

1940年7月8日、朝まだ仕事をしていた彼は、その日のうちに60才という若さでこの世を去った。その2週間ほど後の7月25日には、ドゥマンジョン (Demangeon, A.) が、これまたソルボンヌを退官間際に急逝している。6月14日パリがナチスの手に落ち、7月1日には、ペダン元師のヴィシー政府が誕生して、フランス人たちは1940年の夏を《屈辱の夏》とか《無情の夏》というけれども、フランス学派にとっても深い悲しみの夏ということになったのである。翌年にはヴィダル派の大番頭ガロア (Gallois, L.) もこの世を去っている。40年代の初めにはヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ (Vidal de Blache, P.) によって築き上げられたフランス地理学派は、1つ

の時代の幕が閉じたとさえ思えるのである。最後にドゥマンジョンとシオンに対する尊敬に満ちた追悼文の中で、フェーヴルがこの二人の僚友を対照させて、その特徴を次のように浮き立たせている一節を引用しておく。ドゥマンジョン：「まだあと何年も生きられる丈夫で逞しい人間」「この万能の精神の持ち主」に対して、シオン：「気力だけで生きているか細く弱々しい人間」しかし「この鋭い洞察力に富む精神の持ち主」¹⁴⁾。恐らくこの一文に彼を知る誰もが認めるシオンの人物像が集約されているものと思われる。

(2) 研究活動

次にシオンの研究活動について述べてみたい。第1表はシオンの作品を年次別・分野別に整理したものである。これはポール・マレスによるシオン追悼文の末尾に付された《ジュール・シオン業績目録》に掲げられた文献に、記載洩れの判明した6文献を付け加えて作成したものである。これによると、シオンは著書5冊、論文・短報32、書評・その他20、不明1の58編を残している¹⁵⁾。しかし論文・短報のうち、その半分近くは5ページ以内のノート・短報類で、書き残した量からすると、同世代のドゥマンジ

第1表 シオンの著作の年次別・分野別分類

分 年 野 次	ノルマン ディー	モンスー ンアジア	地 中 海 地 域	一 般 地 理 学	書 評 ・ そ の 他	不 明	計
1904-1909	1 (1)	1	1 (1)		3		6 (2)
1910-1914		1					1
1915-1919		1			5		6
1920-1924		1	1		2		4
1925-1929		4 (1)	4		3		11 (1)
1930-1934			11 (2)	1	3		15 (2)
1935-1940			8	2	4	1	15
計	1 (1)	8 (1)	25 (3)	3	20	1	58 (5)

※主として Marres, P. (1940) : *op. cit.* (10) の《ジュール・シオン業績目録》による。なお () 内は著書。

ンやブランシャール、ソール (Sorre, M.), それに今日のジョルジュ (George, P.) やクラヴァルなどに比して、そのシオンの著名さとは裏腹に、フランスの傑出した地理学者としては珍しく寡作家であったといえる。もちろんただ書けばよいという問題ではないが、とにかくこうした点がまず指摘できる。

さて、彼の研究活動は、この表からもわかるように、およそ3つの時期に分けることができる。

第Ⅰ期は学位論文の作成期である。この時期は、もちろん、上ヴァール地方における水系網の形成に関する副論文の作成のため、この地方へも足を運んでいるが、しかしもっとも力を注いだのは、なんといっても東ノルマンディー地方の地域研究であった。ヴィダルが1898年に高等師範学校からソルボンヌに移って、はじめて学位論文の指導に直接携われるようになったとき、その作成準備者たちに求めたのは、前任者のアンリ (Himly, L. -A.) が行っていたような地理学・地図学史研究や考証学的な歴史地理学研究への傾斜ではなく¹⁶⁾、なによりも野外調査に基づく生き生きとしたフランス各地に関する地誌的研究であった¹⁷⁾。そしてこの師の期待に最初に応えたのがドゥマンジョンであり¹⁸⁾、ブランシャールであった¹⁹⁾。シオンもこれらの先輩たちにならって、ヴィダルの教えにしたがって、東ノルマンディーの各地を歴訪して景観を観察し、住民と接して彼らの労働と日々、彼らのものの見方や考え方等を理解しようと努めた。しかしそれにもまして努力したのは、パリ、ルーアン、エヴルーなどの古文書館に保管されている史料類や土地台帳、地籍図等々の筆写・収集にまわることであった。野外観察、現地の人々との対話と文通、各種の文献、史料・統計類、こうしたデータを徹底的に捕獲して、見事に整序し、完成させたのが主論文『東ノルマンディーの農民』²⁰⁾であった。

自然的側面の叙述が少ないこと、過去の地理学に多くの席を与えていることなど、世紀初頭のどの学

位論文よりも、人間と人間の歴史に大きな比重をかけているところにこの書の大きな特色が見い出せる。しかも他の地域モノグラフィーの多くが部門別に過去に遡っているため、過去のある時代の諸現象間の関連 (liaison) に対する配慮がやや希薄であったといわなければならないのに対して、彼は東ノルマンディーを、主として13世紀、18世紀、そして現在という風に時代を設定し、それぞれの時代の社会的諸事実と地理的諸事実との繋がりが方 (enchaînement) をきっちりと押さえるという方法を採用しているのである。これはまさにヴィダルが説く《地的統一》の理念に則るものであり²¹⁾、普遍的法則を貫く諸現象間の結合のローカルな現われ方の違いと、同一の地域的枠組における時代別のその現れ方の違いとを同時に示してみせようとしたわけである。彼はこの地域的結合体 (combinaison régionale), しかも動的結合体という、すでにヴィダルによって提示されていた考え方を²²⁾、初めてフィールドで実証した人物と考えられるわけであり、この点で後にそれをさらに明確に定式化したショレー (Cholley, A.)²³⁾ やロジェ・ブリュネ (Roger Brunet)²⁴⁾ の先駆者だったといえるだろう。

第Ⅱ期はヴィダル、ガロア監修の『世界地理』の第9巻『モンスーン・アジア』の作成期である。ヴィダルがソルボンヌを退官するのが1909年であるが、パンシュメル (Pinchemel, Ph.) によると²⁵⁾、それは『世界地理』の刊行に専念するためであった。その執筆者の人选は1909～10年頃のものであるので、シオンがモンスーン・アジアの研究に専念するのももちろんその後のことである。1907年にチベットに関する論文²⁶⁾を書いているが、恐らくそれはヴィダルが人文地理学の研究者たちに、自然地理学にも精通することを求めているのと同じ論理で、将来の大学教授たちにフランスの他に、得意とする外国の地域をもつように指導していたことの現われだと思われるが、それはともかく、彼が本格的に取り組むよ

うになるのは1912年の『インドシナの雨』²⁷⁾に関する研究からで、『地理学年報』に、主として短報・資料や書評という形で、モンスーン・アジア関係の研究を毎年のように発表していく。そして第一次大戦が勃発したため、出版はだいぶ遅れ、ようやく1928年にその第一部『中国・日本』が、そして29年に第二部『インド・インドシナ・マレー諸島』がそれぞれ刊行された²⁸⁾。

本書は、20世紀のフランスにあっては、モンスーン・アジアに関する初の本格的な総合の書であったということもあって、地理学界だけでなく、他分野の研究者や、外交官、財界人、現地のフランス人の間でも、広く読まれ、高い評価を受けることになった²⁹⁾。ただ、彼は現地に一度も足を運ばずに、文献・統計類と持ち前の鋭い直観力によって書いたために、フィールドを重視する地理学者、とくにその後の、現地で何年もフィールド調査に携わる外国研究者からは、それが引用されるたびごとに、その点がつねにこたわれ続けられることになった³⁰⁾。しかし逆にいえば、この書の出来ばえが傑出しており、一読に値するものであったからこそ、そうした人々からこの点がわざわざ特記されてきたのだともいえよう。

この書は、アジアとアジア文明に対する強い憧憬と尊敬の念で書かれたといわれているように、随所にアジアの人々に対する彼の深い共感と同情のまなざしが現われている。ときに西欧中心主義者の影が見え隠れしていると判断される箇所がないわけではないが、多少なりとも本国の利害に対する視線を潜ませていた当時の植民地理学 (géographie coloniale) の情勢にあっては³¹⁾、本書はかなりリベラルな視線でアジアが描かれており、やはりそれらとは一線を画しているように思われる。後にピエール・グルー (Pierre Gourou) やレヴィ・ストロース (Lévi-Strauss, C.)³²⁾らによって明確に意志表示される文明相対主義の方向に大きく足を踏み入れたものといえよう。

「若干のアジテーターがいるにもかかわらず、オランダは彼らの穏健なジャワ人に対するこうした恐れをほとんど感じていない。現在、仏領インドシナでもその恐れはほとんどない」³³⁾。しかし「アジアの覚醒はヨーロッパの植民地においても暴動を引き起こす可能性がある」³⁴⁾。「アンナンの不平分子はシャムの独立を羨んでいる」³⁵⁾。「様々な民族が白人嫌悪に目覚めており……もはやヨーロッパはアジアの従順さを当てにすることはできない」³⁶⁾。それゆえ「[今後はアジアを下にみるという考えを捨て]、たとえ同じ色でなくても、両方の民族が協力し合うようになることを期待したい」³⁷⁾。また「相手をよく知るようになるにつれて、互いを認め合い、それぞれの理念を自分のものと同一に扱うことを学ぶようになる」³⁸⁾ことを期待したい。

第Ⅲ期は地中海世界に関する研究期である。それは第1表からもわかるように、1920年代後半頃からである。若きヴィダルが、アテネ・フランス学院のメンバーに任ぜられ、アテネに赴き、ギリシャや小アジアなどをまわって、地中海世界に心惹かれたように、シオンも暗い北フランスから、光の国モンペリエにやって来て、地中海の自然と歴史に魅了されていった。フェーヴルがいうように³⁹⁾、地方の大学に在職するものは、競ってパリのポストに着けるような様々な運動をする中で、シオンだけは誘いがあってもモンペリエを離れようとはしなかったようであるが、このことからシオンがいかに地中海世界の風土と文明を愛していたかがわかるだろう。

この時期シオンは『地中海フランス』⁴⁰⁾と再び『世界地理』の第7巻『地中海および地中海の諸半島』⁴¹⁾を執筆しているが、後者はもともとブリュエヌが担当することになっていた。しかしシオンによると、その死の2年前の1928年に、その死を予感したブリュエヌが、ついにその師ヴィダルと交した約束を断念せざるを得なかったため、急速ガロアから、イベリア半島に縁のあるソールとバルカン諸国に詳

しいシャテニョー（Chataigneau, Y.）とともに、イタリア、ギリシャの事情に明るい彼にも要請があったという⁴²⁾。

この時期彼は次第に現在よりも、過去の世界に興味をもつようになっていく。グレコ・ローマン世界の歴史地理⁴³⁾や地中海世界の農業文明⁴⁴⁾に強い関心を示すようになるのである。彼の死後ゴットマン（Gottmann, J.）によって活字化された未完成原稿⁴⁵⁾も、やはり後者に関するものであった。周知のように、1930年代は社会経済史のマルク・ブロック（Marc Bloch）や地理学者のドゥマンジョン、ディオ（Dion, R.）を中心に農村集落や農地景観に関する研究が両分野の間で脚光を浴びるようになる⁴⁶⁾。恐らく彼は地中海文明の研究をライフ・ワークにしようとしていたと推察されるが、その有力な手掛かりとして広い意味での農地景観を思い浮かべていたからこそ、こうした動きに、一しかし後述するように、全くそれにのめり込んでいたのではなく、多少の距離を置いていたが、強い関心を抱くようになったのではないかと考えられる。

ただしそのような問題に着手していたとしても、彼はあくまでも地理学者としての立場からアプローチしていたのである。つまり彼が古代ギリシャの交通や海洋国家の存在基盤を述べる際にも、地中海平野の農地景観を論じる際にも、つねに歴史家とは異なる視点、すなわち地形や表層地質、気候条件、空間的な形状や位置関係、siteとsituationというすぐれて地理学的な視点を重視し、それでもって、まず歴史を解けるところまで解こうとしているのである。テーヌ（Taine, H.）、ラッツェル（Ratzel, Fr.）、センプル（Semple, E.）の環境決定論が友人のフェーヴルによって断罪された後⁴⁷⁾で、彼は今一度、リッター（Ritter, C.）以来の歴史の地理的基礎という古くて新しい問題を取り上げ、歴史家とは違ったやり方で歴史を洗い直そうとしていたのではないか。すなわちそれまでやや曖昧にされてきた地理学的ア

プローチの有効性と限界を、彼は明確に、かつ冷静に示そうとしていたように考えられるのである。

曰く、「環境決定論を受け入れ難いとする……この慎重なる精神において、我々は古代海洋国家とその形成、その経済活動、その外交政策、この種の国家の半宿命的な衰退における自然的ファクターの役割を明らかにしようと思う」⁴⁸⁾。また曰く、「地理学者はそうに大きく恐ろしい歴史の主題に接近してはならない。ただし彼が歴史家とは違った訓練を受けていること、異なった関心をもっているということから、そう、彼はときには新たな観点を教示し、これまで無視されていた自然的ファクターについて強調することでそれまでの課題をもう一度最初からやり直し、様々な問題を提示することを期待できるかもしれない。……しかしそれは彼が歴史家の仕事を知っているという条件においてである。彼は地理学者とともに歴史家として考えなければならない」⁴⁹⁾。ここに示されるシオンの態度、そこに、地理学と歴史学との異質性と共通性を踏まえて協力し合わなければならないと常々考えてきたフェーヴルの心を大きくとらえるものがあつたのであり、こうした態度によって研究にのぞむからこそ、シオンはフェーヴルからつねに深い尊敬と信頼が置かれてきたのではないと思われるのである。



以上の研究活動を通じて若干の補足をしておきたい。それは、シオンの世代の『世界地理』の執筆者たちにとって、その執筆は相当な負担になったであろうということである。ベルドゥレー（Berdoulay, V.）は、ブランシャールの回想録を引用して、そのことを示唆している。ブランシャールによれば、「ヴィダルはゴッド・ファーザーの如く、〔好みなど構いなしに〕世界をもっとも古い弟子から順番に区切って、分担させていった」⁵⁰⁾という。彼はアルプス地方の研究に取り組もうとしていたので、『西アジア』の巻を担当させられるなんて、たまったものではない、

といったかったのであろう。

シオンの研究活動の時期区分が比較的単純に分けられるのも、ヴィダルにもっとも寵愛された彼が、ブランシャールとは違って、非常に従順であったため、師の指示どおり、ひたすらその課題にむけて脇目もふれず努力したからこそ、こういう結果になったのだと思われる。沈黙考型で、華奢な体質のシオンは、ブランシャールやソールほど馬力もない。こうした性格と体力も手伝って、師から与えられた仕事を何よりとしたからこそ、比較的単純な研究活動のパターンになったのではないか。これを換言すれば、彼が真に自らの意志によって研究が行えたといえるのは、ノルマンディーの研究と30年代半ば以降の地中海に向けられた5～6年間の2つの時期しかなかったように思われる。

それに関連してもう1つ。それは、『世界地理』の人選が決まって間もなくの頃、1910年頃のことであるが、アンリ・ペール（Henri Berr）が『人類の進化』叢書のプランを練っていて、その第1巻を『大地と歴史』とし、その執筆者を探していた。彼はフェーヴルに適当な人物を紹介するように求めた。そのときフェーヴルはためらうことなくシオンの名をあげ、シオン説得に乗り出した。しかしシオンは『世界地理』の執筆が決まったばかりであったので、それを断った。だが執拗に話をもちかけるフェーヴルに断り切れずに、ついにヴィダルに相談し、ヴィダルからフェーヴルに正式に断ってもらっているのである。それで結局、フェーヴルが書くことになったのである⁵¹⁾。

周知のように、フェーヴルの書いた『大地と人類の進化』は意図するとせずつにかかわらず、この書は一方ではラッツェル地理学に潜む決定論に対する糾弾の書として、他方ではデュルケム派社会形態学からの攻撃に対するヴィダル派人文地理学への非常に勇ましく強力な援護論として、当時の、そして長らく地理学者の間で受け留められ、その結果、諸

外国の地理学の流れに対しても、社会学や民族学に対してもフランス地理学者はあまり眼を向けなかった⁵²⁾。したがって、もしシオンが『世界地理』の執筆をせずに、『大地と歴史』を執筆していたら、もっと違った形でフランス地理学は展開していったのではないかとと思われるのである。

というのも、シオンは古くから隣接分野、とりわけ民族学や心理学には関心をもっていたし、社会学にも目を通していたようであり、また後には社会学者との親交も深めていっているからである。その現われは、ラッツェルの『政治地理学』第2版の書評⁵³⁾においてや、『ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの著作にみられる描写法』⁵⁴⁾、『地理学と民族学』⁵⁵⁾などの文献の中に認められるし、『社会生活の地理的基礎』⁵⁶⁾と題する展望論文は、デュルケム（Durkheim, E.）の系統をひく『社会学年報』に寄稿されたものである。またシオンは、確かに、いまあげたラッツェルの『政治地理学』第2版の書評において、それは「真の帝国主義の教科書」⁵⁷⁾で、それを「要約することはそれをほぼ見捨てることである」⁵⁸⁾と厳しく批判し、逆にラッツェルの中に秘められていた空間論の可能性などについては一切ふれてはいないが、それでもここに示された未開社会の説明からは、「社会的事実のより具体的でより経済的な解釈」⁵⁹⁾として、地理学者にも、彼を手厳しく批判した社会学者にも得るところがある。また「ラッツェル氏を学派のリーダーにした資質は、細部の観察の根源にまで遡る人であることを示して」おり、「彼のヴァエティーに富む教養と彼の知識の広さに我々は敬服する」⁶⁰⁾と言って、必ずしも一刀両断に切り捨ててはいない。さらに彼は、ロシアの地理学者ウェイコフ（Woeikof, A.）⁶¹⁾の考え方などを早くから評価しているのである。

晩年の論文『地理学と民族学』は、こうしたフランス地理学の民族学や社会学との断絶状態から生ず

るデメリットをつねづね憂慮し、これらの分野との積極的交流を考えていた、そういう精神状況の中から執筆されたのではなからうか。

「両者〔地理学者と民族学者〕は、つねに一つに結ばれた二項を分離しているこの断層の不都合から逃れるために、互いに、制御として、示唆として、協力し合わなければならない。それは……社会学の諸部分にさえあてはまる」⁶²⁾。「フランスの地理学者のうちで、異国情緒あふれる国々の住民についての研究に寄与した人はほとんどいないし、我が植民帝国における研究に関しても事情は同じである。……しかしながら、この知識そのものは、民族学と接触していれば……得られていたのではないか。そうしていれば、恐らく我々は、我々の知的道具だてを豊富かつ柔軟にし、問題を違った形で提示し、我々の文明を、少なくともそのアルカイックな段階において、他と比較しながら、それをもっとよく理解していたであろう。そうしていれば、我々は繰り返し比較を試みていただろう。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュがもっとも価値を与えていた、かの一般地理学はこうした比較から生まれたのである」⁶³⁾。

したがってフェーヴルのように親分肌でボレミックではない、繊細で冷静なシオンが彼の誘いにのらなかったことが惜まれるのである。

以上が研究活動の概要である。知られるように、彼はヴィダル、ブリューヌをはじめとする今世紀前半のフランスにおける代表的地理学者たちとは異なり、地理学論を展開したまとまった書物や論文をほとんど残していない。我々はただ彼の書き残した地誌関係の著作や書評類からそれを推測し得るだけである。

III ジュール・シオン地理学の地平

(1) 分析視角

「彼〔ラッツェル〕がもっとも詳しく説明する理論は、引き合いに出された事実の少なさから見て、

あまりにも一般的すぎるし、ときには単なる概念の分析からそのまま出てきているものさえある。この事物の多様性……という感覚に乏しいことが惜しまれる」⁶⁴⁾。

「我々は、彼〔マイツェン (Meitzen)〕の諸々の書物に見られる民族的偏見に満ちた諸説、自然条件に対する無頓着さ、図式主義によって、農地の研究に対して疑念を抱いてきた」⁶⁵⁾。

「我々は説明するというよりもまだ記述し、比較すべき資料を探し求める時代にいる」⁶⁶⁾。

これら3つの引用から知られるように、地理的事象を前にしたシオンの態度は極めて慎重で、性急な一般化や図式主義、決定論的な見方に対しては非常に批判的であったことがまず指摘できる。このことは、ブリューヌ地理学に対する見解にもよく現われている。「是非はともかく、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの他の弟子は、ブリューヌほどには、地理学を定義し、その領域をきっちりと限定し、一般的方法でもって原則を定めることには関心がない。植物学における分類とよく似た方法に従って、一連のタイプ……を固定させることは、人文地理学ではまだ時期尚早の仕事だと思われていたし、今日でもそう思われている。彼らは、むしろ……自然地域の精緻なモノグラフィーでもって始めることを好む。……ブリューヌは本質的事実（家屋、道路、農地、鉱山、etc.）を強調する。しかしそれらは……本質的というよりも、むしろより人目を引く事実にすぎないのではないだろうか」⁶⁷⁾。

ア・ブリオリなものを拒み、物事をその多様性の中で見、物事をつねに相対化して捉えなければならないという姿勢が、彼の根底にいつも大きく横たわっていることが窺われる。この相対化は、単に空間だけでなく、時間についてもいえることである。つまり時空間的な枠組の中でつねに事物を比較検討し、相対化させなければならないのである。こうした態度は、学位論文においてもすでに表明されてい

るし、後期の『地中海における海岸線の屈曲』に関する論文では明確に述べられている。「もしこの研究が現在だけに限定されてしまうのであれば、それは不完全なものになりはしないだろうか。なぜなら人間活動の自然法則への適応の仕方は絶えず変革され、文明の状態に応じて変化するからだ。……一種の回顧地理学（géographie rétrospective）の中でこの進化の主たる位相を示すことは、恐らく有益であろう」⁶⁸⁾。「その価値が何世紀もの間、変化しないことはほとんどない、ということを理解せずして、地理的ファクターの重要性を支持したり否定したりできようか。……地理学の役割はその多数のヴァリエーションを地方別・時代別に理解していくことである」⁶⁹⁾。

ところで人文地理的事象は、つねに自然環境との関わりで、まず検討していかなければならないという。「自然環境の詳細な分析だけが各地域が人間の努力、その政治的ないし経済的創造に提供する潜在的可能性を識別することを許す」⁷⁰⁾。これはもっとも自然地理学からかけ離れているようにみえる政治地理学の領域についてもいえることである。このことを彼はアンセル（Ansel, L.）の『マケドニア』の書評において次のように述べている。「しかし政治地理学は自然地理学を無視する権利があるだろうか。明らかに政治地理学は、その本来の目的とは異なった次元で、自然地理学に……取り組むことを拒否することができる。自然環境については、政治地理学は人間集団に与えるその直接的影響を取り上げるだけでも構わない。とはいえそれはこの環境と影響を明確に示さなければならない。そうでなければ、そこに地理学的精神のなにか残されているといえるのか。……下マケドニアについて著者は、その諸平野はすべて湖成層からできていると考えている。だが河川の作用はエーゲ湖のそれよりも明白である。不安定な河川によって運搬され、それらの間にある湿地を塞ぎ止めている堆積物を抜きにして、

サロニカ地方の平原（Kampania）を想像できるだろうか。……政治地理学がデルタの数限りない変化を知る必要がないということには同意するとしても、住民の生活全体を条件づけているその変化のプロセスと結果のいくつかは明確にしなければならないのではないか」⁷¹⁾。

しかし地理的ファクターは、なにもこうした site の面だけではない。シオンは空間的形狀や situation（または position）という面を決して無視してはいない。否、それどころか、当時のフランス学派の中ではもっともこの面を重視していた地理学者の1人ではないかと思われる。「イタリアが久しく被ってきた政治的分断状態は、地形によるよりもはるかに、その伸長性によって準備されていた」⁷²⁾。「海岸線の屈曲の役割は、かつて誇張されたが、今日では狭めすぎる傾向にあるように思われる。少なくとも地中海では、19世紀半ばまではその役割は大きかった。……今日、沿岸の都市の situation が site をはるかに凌いでいる」⁷³⁾。「ポー川とヴェネト地方の諸河川によって形成された平野の……この経済的優位性は、その固有の資源に負っているが、しかしそれ以上にヨーロッパにおけるその position に恩恵を被っている」⁷⁴⁾。

しかしいずれにせよ、こうした地理的ファクターは、あくまでも潜在的可能性にすぎない。この可能性を実現させるのは、弛まぬ人間の努力であり、優れた position を維持していくには、強力な空間管理技術が必要であることを強調する。地中海地域を、享樂的な生活が送れる豊かで、光り輝く土地、ヨーロッパの『菜園』とする考えが、いかに幻想にすぎないものかを、彼は極めて印象的な言葉でこう綴る。「浮浪者になりたくなければ、働かねばならない。しばしば非常によく働かなければならないのだ。地中海の自然は努力を免除しない。ヘシオドスによって描かれた農民の厳しい生活情景には、今日でもなお多くの事実が存在する」⁷⁵⁾。また北イタリアの平

野についても、次のように反論する。「低地の一部を除いて、土地は……必ずしも肥えておらず、それを克服し、それを肥沃にするには、南部の多くのカントン以上に多くの努力が必要であった」⁷⁶⁾。さらに地中海全体の中で優れた position にあるイタリアについて、「距離を克服し、このように長く伸びた有機体の纏まりを維持するには強力な国家が必要である。……イタリア全土に及ぼす支配力を確固たるものにするには、道路網と強力な船団がなければならなかった」⁷⁷⁾と。

こうした人間の努力や政治に加えて重要なものは、交通の流れや市場条件である。「しかしこのポー平野は地中海と中央ヨーロッパとの中間に位置していた。交通の流れが工業を促進し、都市生活の花を開かせたのである」⁷⁸⁾。「こうしてローカルな環境への適応は、時代とともに変化した。それは、一般に、1世紀前の時代ほど完全ではない。というも豊かな土地 (pays) が多くの可能性を無視して、専門化していったからである。我がミディの現在のオリジナリテは、……自然環境よりもむしろ市場の状態によって押し付けられた諸々の限定で作られている」⁷⁹⁾。

しかし交通流や市場条件を作り出しているのは、地域間の差異であり、都市と農村との言葉の広い意味での差異ではなかろうか。「あまりにも類似した地方は同じ生産物を提出するので、それらの産業の発達が非常に異なっている場合でしか、これらの地方間に交易は成立しない」⁸⁰⁾。「栽培地が増加するには、生産がローカルな需要を越えなければならない。それゆえ、生産を吸収するのは商業である。古代以来、2、3の大人口中心地の小麦やオリーブ油、ブドウ酒の調達で、地中海ではこれらの生産物の重要な交換を決定していた」⁸¹⁾。確かに、この2つの引用は、地域間交流は両者の間に差異がなければ生じないという、今から考えれば、当たり前といえは当たりのことをいっているのではあるが、しかし

ヴィグリアンの中で、この差異化の原理にいち早く着目していたのが、他ならぬシオンであり、この原理に則って、彼は学位論文において東ノルマンディーを、地域内の4つの自然地域の有機的連帯と、パリ、ルーアン、ルアーヴルと東ノルマンディーとの機能的関係という図式の中で、この地域のダイナミックな説明に成功したのである。

ここまでの点に限っても、いかに彼が現代的感觉を持った地理学者であったかが窺えるが、しかし今日の意義からみてさらに注目されるのは、彼が人間生活の物質的次元に止まらず、彼の同時代人がとかく眼を覆いがちであった、そして今日の人文主義地理学がようやくその意義を強調するようになった習慣や伝統の力、マンタリテといった側面を、つねにその分析の視野に積極的に組み入れている点である。やや引用が長くなるが、晩年の『地理学と民族学』において示された、それに対する彼の一般的な見解からまず見てみることにしよう。

「〔未開人の〕経済は、社会観や宗教観とか、行為の目的と有効性や、行為における超自然の役割についての観念全体とかに緊密に結びついている。ところでこの種の観念は我々の祖先の観念であった。こうした痕跡は民衆のマンタリテにおいてはなんら消えていないし、ときには地表上でさえ払拭されておらず、地理的表現を残し得た」⁸²⁾。たとえばイタリアや中国の都市プラン、フランスのいくつかの地方の民家の配置にそうしたことが見出せる。また「地中海地域のアクロポリスは、単に、防御の場所だけの意味だったのであろうか、むしろそれを高き所 (lieux hauts) の神々の加護に求められたいだろうか。ある泉の側だけを選ばせ、位置的には優れていても、恐らくそれほど崇拝には値しないその他の泉をなおざりにさせたのは、まさにナイアスの加護ではないだろうか」⁸³⁾。それゆえ「タブー、方位に関する決まり、人間活動を促進するための超自然への呼びかけ (appels)、こうした超理性的な状

況全体に注意を払おう。我々は人間活動が、もっぱら自然環境によって決定されるということや、あるいはそれが物質的欲求の考慮だけによって決定されるということさえ信じることをためらう」⁸⁴⁾。他方、「民族的ファクターから生じる人間の多様性のいくつかは、自然／人間関係を知る上で必要である。なぜならそれがこうした関係の様式と強さを決定し得るからである」⁸⁵⁾。たとえば「様々な人間集団にあっては、『ボン・ペイ』とは何かということや、そこで開発・利用することが望ましい潜在的可能性についての同一の考え方などは存在しない」⁸⁶⁾。また「農業生産は現在でもまだ、食物タブーやそれに対する偏見によって、また嗜好の習慣とそのヴァリエーションによって決定されている。……自然決定論は、ここでは、民族の伝統に対してほとんど力がない」⁸⁷⁾。習慣や伝統の力、マンタリテといった面「の影響を全く認めないことが慎重な態度だといえるだろうか」⁸⁸⁾。

こうした広い意味でのマンタリテ重視の姿勢は、彼の様々な地域分析の基本をなしている。2、3例をあげよう。たとえばフランス革命後のミディにおけるブドウ栽培地域の拡大と土地の細分化の動きを、彼はこの地方の農民層の集団的マンタリテにまで深く立ち入って説明しようとしている。「農民の相当な土地熱のなかで、すでにネアブラムシの危機が始まっていたにもかかわらず、広大な領域が小さな農地片に分割されてしまうほど、彼らはその購入に金をつぎ込んだ。というのも、各人は最後の最後まで、まさか被害は自分のところまでには及ばないだろうという希望的観測を持ち続けていたからである。ミディの農民階級には、少々賭博師的な心理がある。事実、ブドウ栽培には遅霜や雹、隠花植物の進入の恐怖、相場の極端な不安定さがあり、これほど不確実な作物はない。都市の精神を少しくもつ村に集住し、他地域よりもはるかに社交的なミディの農民は、集団的示唆や熱狂、パニックに動かされやすいので

ある」⁸⁹⁾。

また同様にイタリアの農村景観に関する説明では、それをイタリア民衆のローカルな魂の反映と見、人間の自由と創造性を賛美している。「イタリアのほとんどの農村に共通する特徴は混合耕作（coltura promiscua）の広がりである。……植えられた苗木の並べ方、ブドウ畑に仕向ける仕方はいく通りもある。……各地域は独自の方法にしたがって、栽培地の世話をしている。ところでこの方法は、必ずしも単に、技術的必然性や自然環境にのみ由来しているようには見えない。……それらの無益さにもかかわらず、トスカーナ人は自分の土地に装飾を施し、……景観をほとんど創作しようとした。この農村美の追求は、他の地域ではかなりまれではあるが、それでも、多少なりとも民衆の魂を表すこれらの人間化された農村の労働と様相を秩序づける仕方の中に、自然に対してかなり自由なローカル・スタイルとして見出せるものがあるように思われる」⁹⁰⁾。

ある地域が長い歴史をもてばもつほど、マンタリテの意味は大きく、かつ根深い。モンスーン・アジアを研究するとき、アジアの民衆のマンタリテへの配慮がいかに重要かをこう力説する。「個人の家族、カースト、ムラといった社会集団への絶対的服従。移民や工業都市への流出を阻む土地への執着。かけがえのない安定の保証である伝統の尊重。人間活動の自然環境への適応が、社会的規範、集団表象、過去にこれほど緊密に依存しているところは、ここにおいて世界中どこにもない。地理がここほど心理や歴史を無視できないところはどこにもない」⁹¹⁾。

したがって、地域研究におけるこうした民衆のマンタリテを重視する姿勢からすれば当然のことではあるが、物質的側面の分析に止まり、この側面の分析に乏しい研究に対しては多少なりとも不満をもらさざるを得なくなる。たとえばロベカン（Robequain, C.）の学位論文『タンホア』に関して、その意義と功績を認めつつも、「彼が、現地人の社会的状態やマ

ンタリテが、我々と接触するようになって、いかに変わったかを示してくれることを期待していた」のに、それが触れられておらず、フランスによって遂行された公共事業などの事実の簡単な説明だけで終わっていることに、こうした事実だけを述べる態度は「つねに必要とは思いが……」⁹²⁾と、物足りない気持ちをもらしている。



今まで述べた点をひとまず整理してみると、地域という地理的複合体を捉えるアプローチには、一方では①地表構成要素間の作用関連を捉える《たての関連》のアプローチと、②地表の部分相互間の関連を捉える《よこの関連》のアプローチがあり⁹³⁾、他方では③その客観的次元を問題にするアプローチ、すなわち地域なり空間なりを外側から捉えるアプローチと、④その主観的次元を問題にするアプローチ、いわば地域を内側から捉えるアプローチがある⁹⁴⁾と考えられる。内側から捉えるというのは、人間集団の知覚や態度、価値といったものから、彼らによって空間がどのように感じられ、生きられ、価値づけられているかを通して、地域というものを捉えようとするもので、優れて《人間中心主義》的な視点に立つものである。他のヴィダリアンたちが主として①と③の面に重点を置いて研究をすすめていたと判断されるのに対して、シオンは①の《たての関連》的視点に②の《よこの関連》的視点を、③の客観的次元の視点に④の主観的次元の視点を導入して、全体的に地域総体なり地域の個性 (personalité) を解明した、あるいは少なくとも解明しようとした点に、今世紀前半のフランス地理学者にはあまりみられない1つの大きな特色があり、またこの点に現代地理学にとっても貴重なパースペクティブを与えてくれているのではないと思われる。

ただしバットーが舌足らずに、シオンの学位論文に関して、ノルマンディーとピカルディーの違いを、彼が両地方住民のマンタリテの違いに求めて

いるという紹介をしているのである⁹⁵⁾が、そういう紹介だけでは、かつて石炭に関して、石炭は人間が無類のエネルギー源であることを知らなかったならば、ただの石と変わらない⁹⁶⁾という説明をして、心理相対主義に陥ったと非難されたブリュヌと同次元の発想者ということになってしまう⁹⁷⁾。

確かにシオンの学位論文では、やや説明不足な面もあって、ときには慎重に読まなければ、たとえば綿工業の発達するルーアンと、その原料の輸入港でありながら、綿工業が発達せず、遠隔地交易に専念するルーヴルとの違いの原因を、簡単に両者のブルジョア層のマンタリテの違いといっているかの印象を与えるような文章に出会う⁹⁸⁾。そういった点で、ヴィダルを少々不安がらせ、「シオンは人文地理学を心理学的観点から考えている」⁹⁹⁾というヴィダルからの戒めの言葉さえ生まれるのである。しかしこのヴィダルの批判が誤解に過ぎず、シオンがマンタリテにかなりの独立性を与えていたとはいえ、それを必ずしも事物の決定因に短絡的に直結させておらず、生態学的次元や社会経済的次元を決して無視していないことは、学位論文のこの文章自体においても、他の部分においても、またこれまで引用してきた文章からも明らかであるし、次の一節を読むとき、我々は彼がなによりも心理学主義につよい警戒の念を抱いていたことを認めざるを得なくなるのである。「地理学的分析は、自然環境が説明するあらゆるものをよく見るために、今後は深く突っ込んでいかなければならないだろう。確かにそれは社会的環境を通してしか作用しないが、しかしそれを無視するには、集団的マンタリテとか伝統とかいう、まだ非常に漠然とした観念の中で大胆な説明を求め過ぎる傾向にあるように思われる」¹⁰⁰⁾。

要するに、客観的次元、主観的次元を別々に研究するのではなく、両者を合体させた全体的アプローチを主張・提唱しているのである。この主張がもっとも明確に現われているのは、『地理学と民族学』の

一節である。つまり「そこで生きるために大地を改変したのは経済人ではない。それは、生活条件の改善ばかりでなく、社会的なもの、そして宗教的なものすべてを合わせもった全体としての人間(*homme tout entier*)である」¹⁰¹⁾。

ところで、彼の時代には新カント派的唯心論やベルグソン (Bergson, H.) 哲学、それにポアンカレ (Poincaré, H.) の規約主義が、彼らの哲学観や科学観を支配していたということが通説となりつつあるが¹⁰²⁾、果してそれがどこまで普遍性をもち得るのであろうか。確かに彼らの人間観や、非決定論的態度、可能性重視の立場には、たとえばエミール・ブートルー (Emile Boutroux) の『自然法則の偶然性』¹⁰³⁾において展開された諸論に類似した点が少なくないように思われるが、しかし彼らがどこまでブートルーやその後続くベルグソンやポアンカレを読み、理解していただろうか。しかしもし仮にその影響を認めるとしても彼らの中には、少なくとも方法論的には、狭義の実証主義的科学観とそれとの間を振り子運動のように、かなり揺れ動いていたのではないだろうか。というのは彼らも、デュルケームの如く、地理的事象を《もの》として見、《もの》として捉えるべきという発想がかなり根強かったように思われるからである。ただデュルケームと違って、やや屈折した形で保持されたために、客観的次元を飛び越えて主観的世界に入り込むには、社会形態学との関わりとも相俟って、恐らく大きな躊躇があったのだらう。なぜなら地理学とは社会生活の地理的基礎を研究する学問分野だからである¹⁰⁴⁾。

確かにドゥマンジョンがアルディー (Hardy, G.) の『心理地理学』に下した判定¹⁰⁵⁾は間違っている。しかしその言葉は一人歩きして、フランス学派は物質的側面の中にますます閉じこもることになった。シオンはそれを憂えた。「我々の関心を引くものは、彼と同様に、確かに人間化された景観

ではあるが、しかしとくに関心があるのは、自然環境の中で活動している人間 (*umanita*) に関してである」¹⁰⁶⁾。これはブリュヌの物質主義に対する彼の批判であるが、恐らくこれは同時代人全体に対する喚起でもあったのではなかろうか。彼がヴィダルの『フランス地誌』に見られる描写法の独創性について語るとき、その反省を求めていることが窺われるのである。「ヴィダルの方法の中にあるより独創的なものは、おそらく理性を補うために、夢、記憶、暗示、つまり無意識の力に助けを借りて、《真の地域 (*pays*) 感情》を創出するやり方であらう。……今日の地理学者はどの程度この描写法を手本にすべきだろうか。『フランス地誌』のような芸術作品は盲従的に真似られてはならない。ヴィダルの弟子たちがこれほど広くなく、これよりもっと客観的な研究に専念しようとしたことが理解される。けれども我々は、学問的研究に、我々の地域 (*pays*) 像や地域感情を織り混ぜることを拒否したことで、慎重さの行き過ぎという罪を侵していないだろうか。いろいろな点で、我々は先生の残された遺産の一部、おそらくもっとも優れたものを失くしてしまったのではなかろうか」¹⁰⁷⁾。

(2) 3つの方向性

シオン地理学には、現代地理学とふれあうところの少ない、3つの方向性が秘められているように思われる。

a) 文明の地理学 1つは文明の地理学という方向性である。これはリグリー (Wrigley, E. A.) 流にいうと¹⁰⁸⁾、ヴィダルの1910年以前の発想 (仮に前期ヴィダルとする) に非常に忠実というか、非常に近いように思われる。この点で彼はヴィダルと、文明概念をより操作的概念としてエラボレートしたグルー¹⁰⁹⁾、さらにドゥ・プラノール (de Planhol, X.)¹¹⁰⁾やオーギュスタン・ベルク (Augustin Berque)¹¹¹⁾との橋渡的存在だったといえる。

ヴィダルは必ずしも明確には定義していないが、文明を「経験の集積」¹¹²⁾とか、安定した習慣の総体としている。生活様式についても明確ではないが、文明の表出、具現された技術総体だと考えられる。文明と生活様式との関係は類比的に言えば、恐らく言語学でいうラングとパロールとの関係ではないかと思われる。すなわち文明は生活様式の条件であり、内側からその在り方を規制する潜在的構造であり、反対に生活様式は文明の隠れたコードに基づいて発信された具体的なメッセージ、文明を具体化し、顕在化したものといえよう¹¹³⁾。文明はいきなり研究できない。それは生活様式の個々の分析から解読されるべき一種の暗号表であるからだ。ヴィダルが弟子たちに各地域の生活様式の研究を指示したのは、1つにはこういう理由が働いていたからである。しかし弟子たちの多くはこの意味をよく理解していなかったために、当該地域の自然的事実から人文的事実にわたる百科全書の迷宮の中を彷徨うことになった。シオンはこの師の説く意味を鋭く見抜いていたように思われる。

パンシュメルが説くように¹¹⁴⁾、ヴィダル地理学の本質的部分をなすものは文明の地理学であったと考えられるが、シオンもまた、長期的に練り上げられた安定した習慣の総体であるこの文明を明らかにし、そこから逆照射して地域を説明しようとしていたように考えられる。ヴィダルは文明の進歩または停滞の地理的条件を、主として他地域との接触・交流に求める¹¹⁵⁾。シオンもまた、ヴィダルと同様に、まず situation と交通の流れに求めているが、彼はそれで満足しなかった。接触・交流は、確かに進歩の条件であるが、しかしイノヴェーションの受容の最終決定は、その土地に居住する人間集団の社会的状態に関わるものと考えからである。先の脈絡からいえば、長期的な時間枠の中で練り上げてこれた民衆の習慣やマンタリテに、地理的複合体の構成要素の中でかなり独立性を与えたのは、このような

発想からである。

かつてルラヌーが生活様式概念は社会学的な概念であることを指摘しているが¹¹⁶⁾、シオンの文明概念は、グルーのそれと同様に、哲学的社会学的概念に止まらず、地理学的概念である。それは空間組織化のもっとも深層に位置する原理である。シオンの文明分析がもっとも端的に示されているのは、恐らく『モンスーン・アジア』の『日本の景観』に関する節に見られるものであろう。そこで彼は、日本人の自然に対する見方・感じ方という面から、日本の空間組織化の根本原理を説明しようとしているのである。まず彼は日本人の木に対する崇敬をあげ、それが中国人ともヨーロッパ人とも異なる日本人のオリジナリテの1つであることを指摘する。そしてこの世界でも稀な森への愛は単に絵画のモチーフの選定だけではなく、花の鑑賞や建築の中にも浸透している。それは自然に対抗するのではなく、つねにそれへの融和が見られ、それによって建築全体が自然に溶け込んだ秩序ある景観を生み出している。こうした自然の開発・利用技術は生花や庭園に凝縮されている。

そして曰く、「この自然の魅力は日本人をして風景のただ中で暮らさしめ、優雅に享受せしむるのである。日本人は風景の深層にまでその優美を感知することができる。空の変わりゆく色を微妙に感じ取ることができるのである……。日本人は地形のくっきりとした、エレガントで、気紛れな線、人の目を引き、楽しませる限りない細部を浮き立たせる線を目で追う。……同様に、美的配慮は住居の間取りやもっとも貧しい人々の日常生活にも現われており、中国とは全く異なる点である。日本人がなんというユニークな仕方でも自然を感じているか……単に、日本人の伝統的な風景（sites）に対する好みだけを示しておこう。それは何世紀も前から人々が詣でにやって来た場所であり、いく世代もの芸術家や詩人に靈感を与えた場所である。宗教的感動と

これらの多数の思い出が目の楽しみと結び付いて、民族の過去と固く混ざり合ったこの人間化された自然をより愛しいものになっている。……そこから本質的に麗しの国への愛である、非常に熱烈な愛国心が生まれた……。またそこからこの郷土への根強い愛着が生まれたのである。日本人は……旅人としても、また巡礼としてもはるかに多く旅をする。しかし一昔前には中国人よりもはるかに外国を訪れることが少なかった。中国人はすすんで祖国を離れ、新たな環境にすばやく適応したのに、日本人は今日でもなお、はるかに固い繋がりによってその島に止まっている。日本人にはその風土、生活習慣、馴染みの風景がある。……日本の変化の速さの目覚ましきによって、我々はそこで伝統によって保存されてきた力を忘れてはならない。つまりこの力は、とくに宗教や家族的倫理に由来しているが、しかしこの感じのよい自然への崇拝とそれがその刻印を押してきた思想や風習からもきているのである」¹¹⁷⁾。この民族の心理・文化的側面から、空間組織化の原理を究明しようとするいき方は、半世紀後ようやくベルクによって本格化されることになる。

このベルクはシオンに対して、「日本が種々の面でより広範な文化領域に属しているということ、そして日本の真の独自性をこのような脈絡の中——韓国、中国など——において考察しない限り、うまく見い出すことができないということを示した」¹¹⁸⁾、と評価しているが、まことにその通りだと思う。ある1つの地域を説明するときでも、他の同時代人がとかくその地域をより広い脈絡から切り離して、その地域だけにしか注意を向けなかったのに対して、シオンがつねに世界史的な視点からそれを眺めていたのは、彼がつねに文明を意識していたからと考えられる。だからこそ、彼は当時、ドイツ、イギリス、そしてブロック、ディオンらによってフランスにおいても注目されるようになった、しかも既述のように、彼自身も関心のあった農地構造あるいは農地文

明の研究に対して、つねに一歩距離をおいてその動向を見守り、ときには後二者、当時の著者たちの中では非常に広い視野に立っていたと考えられるブロック、ディオンの（性急すぎる）結論、（狭すぎる）視野に対して、あえて警鐘を發したのではないかと思われるのである。

「この錯綜した多数のファクターを解きほぐすことは、同じ結果が全く違った原因から起こり得るだけになおさら厄介である。ロレーヌ型が主に北フランス、西部ドイツ、かつてのイギリスに広がっているが、それは民族的影響にせよ、土地や気候のなんらかの類似性にせよ、そういうものによって説明されるように見えるが、しかしシリアの平野にもこれと全くよく似たものが見出せる。……いずれにせよこれらの予期せぬ類似性から、この構造がある民族（race）、ある宗教に固有のものでないことが知られる」¹¹⁹⁾。

b) 空間組織論 しかし一方では、少なくとも学位論文においては、後期ヴィゲルと同様、都市＝農村関係を軸とした空間組織論の萌芽が認められる。このことは別稿において若干ふれておいたし¹²⁰⁾、学位論文の特色については上でも述べているので、詳述は避けるが¹²¹⁾、要するに、彼は13世紀、18世紀、そして19世紀末～20世紀初頭という3つの時点を取り出して、各時期における人間／環境関係あるいは地域的結合を復元し、社会的状態（文明の状態）の違いによって、この関係なり要素間の結合の仕方が異なることを明らかにしているのである。彼はこの中で、18世紀以降になると、社会的事実の中でも、とりわけルーアンやパリなどの都市ブルジョア層の存在が東ノルマンディーでは大きくなることを強調するわけである。なぜ都市ブルジョア層の存在が大きくなるかといえば、それはとくに16世紀～17世紀に東ノルマンディーを荒廃させた数々の戦乱によって、農民は自分で土地を持つよりも、都市ブルジョア層の小作人になった方が有利と

判断したからである。このことはマルク・ブロックなどが後にいう《集団記憶》という問題¹²²⁾と絡めて考えると極めて興味深いわけであるが、それはさておき、東ノルマンディーでは時代が新しくなるにつれて、ますます都市ブルジョア層の力が増している、今や農業生産から人口状態までの、住民の生活のかなりの部分にまで都市の影響力が浸透し、それを抜きにしては東ノルマンディーの地域は掴めないことを明らかにするのである。

「土地のほとんどが、商業や製造業によって富を得たこのブルジョア層に属しているのである。中世以来、ブルジョア層が獲得し、成長してきた経済力は、つねに東ノルマンディーのもっとも辺鄙な農村地帯に現われている。ブルジョア層は、そこで家内工業に推進力を与え、この地方全体を長く豊かにしてきた」¹²³⁾。しかし家内工業が衰退した「今日、それによって生活の安楽が保証されてきた住民は、自分たちの生活を十分養ってくれない土地を捨てなければならなくなっている。……彼らはパリ、ルーアン、ルーヴルといった同じ都市……に吸収されているのである。……諸大都市に近接する農村地域である東ノルマンディーはそれらの影響下で形成されてきた。そしてそれらの支配階級がこの地域の支配階級となった。この地理的まとまりは、自然からよりも、人間から生まれたものである¹²⁴⁾。こうした発想はもう少し頑張っていれば、1950～60年代のデュグラン（Dugrand, R.）やロジェ・ブリュネラの都市＝農村関係研究に極めて近いものになっていたように思われる¹²⁵⁾。

しかし人口移動の問題についても、都市住民による農村の土地所有、不在地主の地位などにしても、たとえば「土地がそれを耕す人々に属しているかどうか、それが大きな所有地に分割されているか、小さな所有地に分割されているか……」を研究することは地理学的な仕事となる¹²⁶⁾とか、「彼らは自分が作り出す富をすべて持てるわけではなかった。一

部はこの都市ブルジョアの手に渡った。このブルジョアの村の生活における役割はつねに強調されなければならない。1879年の住宅外所有地（propriétés non bâties）統計によると、セーヌ・アンフェリウール県では13,303人の不在地主がいた。この数はフランス全県中第3位に当たる。……このことは都市住民によって農村で所有される不動産の重要性を示している」¹²⁷⁾という指摘だけで、デュグランらのように、土地台帳の詳細な分析を行おうとはせず、もう一步というところで手綱を弛めてしまうのである。いわばヴィダルが1910年以降、都市を中心とした空間組織研究へと向かおうとしていたのとは対照的に、シオンは空間組織論から文明の地理学へと移行していき、ヴィダルとは逆方向の道を歩んだともいえよう。とはいえ、その後の研究でも、土地所有の問題はつねに彼の念頭にあり、都市ブルジョア層による土地所有をめぐる農村支配への視点は決して消えはしなかった。しかし後期の彼の念頭に置く農村における都市の意味は社会経済的というよりも、むしろ社会文化的な面からとらえられることの方が多く、たとえば『地中海フランス』では都市を、主として、思想的・文化的情報の拡散センターとしてとらえられているのである¹²⁸⁾。

c) 社会地理学 さらに当時の地理学者から見てシオンの傑出している点がある。当時のたとえば学位論文に代表される地域モノグラフィーを見ると、そこでは農業や工業の生産物、生産方式、生産技術の多様性、集落形態や民家型式の多様性は十分検討されている、それらを実践し、そこに住む人間の多様性にはほとんど関心が示されていない¹²⁹⁾。まだ当時は社会的分業化がそれほど進行していなかったからだといえなくもないが、それにしても、そこで描かれた人間はたいがい農民、せいぜい工業従事者といった産業分類的な均質で一枚岩的な人間、自然の開発・利用に努力する知性的人間である。それ

は農民、単数の人間集団である。彼らが生きる農村は、たとえときに狼や洪水の恐怖に脅かされようと、普段はうらかな春の陽ざしを浴びたのどかな田園風景の展開する空間である。そこには支配―従属関係や階級対立といったきな臭さがほとんど匂わない。その点で、シオンは社会構造を社会階層別（たとえば借地農、日雇農業労働者、都市ブルジョア層、織工など）に、かなり細かく検討を加えているのである。彼の作品に登場する人々は、諸人間集団に属する人々である。（もっとも商人をはじめとする第3次産業従事者や都市住民はほとんど出てこないけれども）。かつてロジェ・ブリュネが今世紀前半の地理学者の中でシオンを高く評価したのはこの位相においてである¹³⁰⁾。

しかしそれにもまして注目されるのは彼の視点である。つねにシオンの中にあり続けたもの、それは民衆、一般庶民の暮らしに向けられた視線であった。その中には貧困、非衛生状態、悲惨な生活を強いられながらも必至で生きている民衆への深い同情と共感があるように思われる。彼の同時代人の多くは、今世紀初頭に、ヴィダルが「社会的・経済的オーダーの諸問題」を「党派心が必ずしも排除されない論争の種である」¹³¹⁾とか、「これらの経済的オーダーの問題は……地理学よりもむしろ歴史学か統計学に属する問題ではないか」¹³²⁾という形で社会問題にふれることをよしとしなかったため、この面に関しては沈黙を守り続けていた¹³³⁾。しかし彼は地域的現実を目の当たりにみたとき、このタブーを破り、社会問題的視点に立たざるを得なかったのであろう。

事実、彼の作品には労働者や貧農層といった社会的弱者の生活への言及が実に多い。たとえば学位論文では世紀末の日雇農業労働者の生活の苦しさを、食生活にまで立ち入って述べていたり¹³⁴⁾、また家内工業を営む農家の劣悪な労働現場の実体について述べているし¹³⁵⁾、また『モンズーン・アジア』で

はインドや日本の工場労働者の息詰まりを述べたり、西洋との接触によって巻き込まれた貨幣経済の中で、混乱する社会的精神的状態や、インド人記者の眼から見た西洋人に対する不満の理由を取り上げ¹³⁶⁾、『地中海および……』では、たとえばイタリアの南部問題に言及し、その改善に対するファシスト政府の努力を評価しつつも、それが南部人の伝統やマンタリテを無視していることを批判し、南部問題の根の深さを浮き彫りにしている¹³⁷⁾。さらに『テッサリアにて』では長年オスマン・トルコの支配下にあったギリシャ、テッサリア地方の大地主の重圧に堪え忍んでいる小作農の姿を描いている¹³⁸⁾。

「多くの家庭では普通の献立はいつも同じである。恐らく日雇労働者ならもう少し多くアルコールを飲むだろう。しかしその代わり、彼はもっと肉を食べない。毎日ジャガイモの煮込みシチュー、燻製ニシン、ヌフシャテル・チーズの並ぶ食卓を前にする。ジョッキには非常に薄い水割りのシードル酒……しか入っていない。彼がノルマンディーで稀にみる酒類の節制家でなければ、そしてその子供が菜種を移植したり、甜菜畑の雑草を抜いて数スーを稼げる年齢でなければ、彼らはこの村の厄介者になる。当然、彼らは兵役から戻ってくるとき、この生活をもう1度やる気にはなれない」¹³⁹⁾。こうした態度はブリュネの弟子ではあるが、シオンの学位論文を評価するデフォンテーヌ（Deffontaine, P.）の学位論文でも庶民重視の姿勢として受け継がれている¹⁴⁰⁾。

近年エラン（Hérin, R.）は、ブリュネの『人文地理学』の再読から、彼をフランスにおける社会地理学の先駆者として再評価すべきことを提唱している¹⁴¹⁾が、同じことはシオンについてもあてはまるだろう。社会地理学をルネ・ロシュフォール（Renee Rochefort）にならって、「空間よりもまず人間集団に重点を置き……人々の空間の中での感じ方」¹⁴²⁾をなによりも重視する学問分野とする

ならば、確かにシオンは社会地理学の先駆者だったといえるだろうし、シオンを師の1人と考え、彼の地理学に共鳴していたルラヌー¹⁴³⁾、そしてその弟子のロシュフォールと続くリヨン社会地理学¹⁴⁴⁾の中で、彼の地域住民へのまなざしは開花していくことになるわけである。

IV むすび

しかし彼の地理学の他のベクトルはすべて文明の地理学に吸収されるであろう。もう1度この文明の地理学の方角性について若干ふれておこう。彼は30年代以降一段と伝統的歴史的世界に入っていく。もちろんそれには『世界地理』の執筆があったことが大きいかもしれないが、しかし『世界地理』を書き終えてからはなおさら、古代ギリシャや古代地中海交通などの研究を行うようになる。他方、『モンスーン・アジア』においては、彼は中国よりもインドや日本を好む。たとえば日本と中国の森林の状態に関して、森林を徹底的に破壊した中国人よりも、独特の自然感情から森林と共生関係にある日本人を好むわけである。これは長い間に蓄積された自然と人間との関わりの経験から生まれた中国文明と日本文明の違いなわけである。長期的な時間枠の中でかなり安定したリズムをもつもの、そうしたものを一番重要視しているように思われる。だからこそ彼は文明の地理学に向かっていったのではないだろうか。彼は目まぐるしく移り変わるものをあまり好まない。この変転極まりない現実の根底にあって、半永久不変の層への愛着は、彼の先輩であるドゥマンジョンが、つねにアクチュアルな状況に眼を向けていた¹⁴⁵⁾のとはかなり異なっているし、この点でシオンの保守性が指摘できるが、こうしたシオンの指向はきっかけがなんであれ、その背後には、彼と同世代の多くの知識人と¹⁴⁶⁾同様、センシブルなシオンの第一次世界大戦の経験が大きく影響しているのではないかと思われる。つまり価値が一夜にして変わ

る変動の時代に、彼は不動の価値を求めようとしていたのではあるまいか。

ところでシオン以後、フランス地理学はどのように展開していったのであろうか。たとえば農地景観の研究は、シオンの批判を受けたディオンが地中海地域の事情をよく知らなかったことを認め、その後この地域の研究こそ行わなかったものの、その上に立ってより広い視野から研究を深めていった¹⁴⁷⁾。またシオンのこよなく愛したイタリア以東の地中海地域の研究についても、彼から直接助言を受けたルラヌーがサルデーニャの研究以後、この地域の研究を発展させていき¹⁴⁸⁾、またモンスーン・アジアの研究はとくにグルーによってよりエラボレートした形で進められていく¹⁴⁹⁾。また学位論文で提示された方法論の一部は、たとえばミュッセ (Musset, R.) の『下メーヌ』¹⁵⁰⁾やデフォンテーヌの『ガロンヌ川中流部地域の人間と労働』¹⁵¹⁾、それに一番弟子のマレスによる『グラン・コース』¹⁵²⁾において受け継がれていく。つまり個人レベルではシオンの思想を継承する地理学者は現われていたのである。しかし学界全体の流れとなると果たしてどれだけシオンの地理思想が理解されていたであろうか。

シオンが没して7年後の1947年、ゴットマンは、当時の学界に対して、極めて挑発的な論文『人文地理学の分析方法について』¹⁵³⁾を書いた。そして多くの若い世代はこの論文に共感を示した。ゴットマンがこの論文の中で示したものは、①自然地理学に比べて、人間社会という非常に個性ある事象を取り扱うにもかかわらず、これまでの(フランス)人文地理学の分析方法には、こうした事象を相対化して説明し得る一般法則や一般原理といえるものがほとんど欠如していたこと、②ドゥマンジョンの農村集落に関する業績は、現段階までの人文地理学の唯一とでもいえる原理ではあるが、しかしあまりにスタチックであるため、もはや今日のダイナミックな世界の分析には対応しきれないこと、③したがって、

現代世界に対する切れ味のよい分析方法としては、生産を規定する消費と、人やものの流れを結節する十字路（carrefour）ないし十字路網に着眼していかなければならないこと、などの主張であった。否、むしろそうとられたといった方が正確であろう。というのもこの論文ではもう1つの重要な点が述べられていたからである。

とかく見逃されがちであるが、ゴットマンはこの論文の後半部分で、消費の地理学的重要性を説いた後、地理学研究における人間集団の精神的次元の重要性を強調していたのである。すなわちこれまでのフランスにおける地理学研究は、しばしば皮相な物質主義に走る傾向があった。それは客観性を重んじるあまりに、地理学者が自然科学的な手続きに依拠しすぎてきたからである。しかしたとえば人口の移動や居住の型を考えるとき、人々の中にある精神的ファクターがそこで大きな役割を演じていることは明らかである。したがって、人文地理学が個性ある人間社会をよりよく理解し、人文地理学をより豊かなものにするためには、今後は自然科学的な手法からも少し距離をおいて、もっと人間集団の精神的次元にスポットをあてた研究をすすめていかなければならないことを力説していたのである。「心理学的生活は人文地理学のディナミズムの根本をなす」。地理学が「科学的であるためには、分析方法は、それゆえ、事実に対して単純すぎる地理的物質主義を放棄しなければならない」¹⁵⁴⁾。

このことは、この論文の出る10年前にシオンが『地理学と民族学』において、すでに主張した論点と全く同一次元に位置づけられる主張である。しかしこれは上述の如く全く看過されてしまった。ゴットマンより一足早く研究活動を開始したグルーやルラヌも、ゴットマンと相前後して40年代後半以降特筆すべき発言を展開させていった¹⁵⁵⁾が、同様の運命を辿ることになった。50～60年代はまさにジョルジストの《経済社会構造分析》全盛の時代で

あった。60年代にはルネ・ロシュフォールのシチリア¹⁵⁶⁾、フレモン（Frémont, A.）のノルマンディー¹⁵⁷⁾、ガレ（Gallais, J.）のニジェール川内陸デルタ¹⁵⁸⁾に関する研究などが間欠的に見られたが、後続部隊がなかなか現われなかった。《生きられる空間》や《社会地理学》、《文明の地理学》の研究が本格化するのは70年代も後半になってからのことである。たとえ彼らの名前が引用されていなくても、ここにきてようやくシオンの望んでいた方向性が陽の目を見ることになったのである。

それにしてもシオンの地理学は地理的複合体を、その《たての関連》と《よこの関連》、《客観的次元》と《主観的次元》を時間軸の中で捉え、つねに世界史的視野に立って研究しようとする壮大な構図をもつものであった。このシオン地理学の深みに接するとき、我々はとかく客観主義とフィールド主義の呪縛の中で非常に些細なことに拘り過ぎてはいないかどうかの反省に迫られる思いがする。

冒頭でも述べたように、本稿はシオンの地理思想の単なる序章的な意味に過ぎず、未だその全貌を明らかにしていない。たとえばここで全くふれられなかった彼の地域描写法をめぐる問題については、そこにみられる詩的喚起的方法とでもいえるシオンの方法は、ヴィダルから鋭く見抜いたものではあるが、それは必ずしも文章を美しくするためというのではなく、むしろ決して分析主義的視点からでは捉えられない地域の内に潜む不思議な生命力を明るみに出すためのものであったように思われる。彼もまた、古代ローマ人がそれと交感していた《土地の霊（genius loci）》¹⁵⁹⁾にせよ、ロレンス（Lawrence, D.H.）の《土地の精神（spirit of place）》¹⁶⁰⁾にせよ、ルネ・デュボス（René Dubos）の《内なる神》¹⁶¹⁾にせよ、『星月夜』に描かれているようなヴァン・ゴッホ（Van Gogh）の見た大地の生命力にせよ、とにかくそういう力を、彼の扱う土地にひしひしと感じていたのではあるまいか。だとすれば、彼の文明観念と文明の

地理学は、構造主義とともに、風景の現象学という角度からも再読する価値があるように思われるし、また彼の描写法にみられる時空間観念をマルセル・ブルースト (Marcel Proust) の時空間観念¹⁶²⁾と比較してみることも価値があるように思われる。これらの点についてはいずれ稿を改めて検討してみたいと思う。

〔付記〕本稿作成にあたり、文献のことでは九州大学の野澤秀樹先生ならびにポール・ヴァレリー (モンペリエ第三) 大学のアンリ・ピシュラル (Henri Picheral) 先生にお世話になった。また野澤先生ならびに甲子園大学の松田信先生からは貴重な御助言をいただいた。筆者が初めてシオンの文章に接したのは、日頃より御指導賜っている八代学院大学の林宏先生から頂戴した『地中海フランス』であった。以上の先生方に深くお礼申し上げる次第です。なお本稿は福岡地理学会冬期研究発表会 (1987/2/1) において報告した草稿に加筆・修正したものである。

注

- 1) この例として、たとえば次の2つを上げておく。
Dickinson, R. E. : *The Makers of Modern Geography*. Routledge & Kegan Paul, 1969, 305p. ;
Meynier, A. : *Histoire de la pensée géographique en France*. PUF, 1969, 224p.
- 2) グルノーブルからはフォーシェ (Faucher, D.), アルボス (Arbos, Ph.), アリックス (Allix, A.), ブラーシュ (Blache, J.) をはじめ、数々の秀れた地理学者を輩出している。
- 3) Brunhes, J. : *La géographie humaine, essai de classification positive. Principes et exemples*. 1910, (松尾俊郎抄訳『人文地理学』古今書院, 1929, 531p.); Vallaux, C. : *Les Sciences géographiques*. Félix Alcan, 1925, 413p.
- 4) Buttimer, A. : *Society and Milieu in the French Geographic Tradition*. Rand McNally, 1971, 226p.
- 5) たとえば Claval, P. : ① *Géographie et profondeur sociale*. *Annales, E. S. C.*, 22, 1967, pp. 1005-1046. ; ② (avec Nardy, J. P.) *Pour le cinquantenaire de la mort de Paul Vidal de la Blache*. Les Belles Lettres, 1968, 130p. ; ③ *Principes de géographie sociale*. M. - Th. Génin, 1973, 351p.
- 6) 本稿では彼の地理学が生まれてきた社会的・思想的背景についてはほとんどふれていない。それは筆者のこの方面に関する知識や理解が未だ十分ではないことにもよるが、(社会的・思想的背景を問題にすることは1つの道であり、その重要性は十分認識しているつもりではあるが、そしてそれを無視してしまえばその研究は、地域研究の中で社会経済的側面を無視した過去の悪しき形態論と同じように、発展性のない皮相な研究で終わってしまうだろうが)、しかし筆者の感覚では、フランス地理学史ないし地理思想史研究の現段階では、その前提となる、研究の基本単位である個々の地理学的作品やそれを生産する個々の人物の地理思想がほとんど明らかにされていない状況にあるため、忘れられた地理学者を発掘したり、一面的にしか評価されていない地理学者を再検討したり、とにもかくにもまず各地理学者の業績全体を展望しなければならないと判断したからである。
たとえば従来の研究で取り上げられた人物のほとんどがヴィダル、ブリューヌ、ヴァロー、ドゥマンジョン、ソール、ショレーといった地理学論の書物を著した地理学者に限られてきた。もちろん多大の影響力を持っていたのであるから、なによりもまずこれらの人物が取り上げられることになんら問題はない。しかし筆者の感覚からすれば、少なくともドゥマンジョンに限っていえば、取り上げ方はかなり一面的ではなかったかと思われる。この取り上げ方を、それこそ社会的・思想的背景とクロス

- させて検討すること自体非常に興味深い問題であるが、彼はつねに集落地理学者、せいぜい民家研究にみられる機能主義の先駆者として捉えられ、彼の地理学の非常にスタチックな面が前景に置かれてきた。たとえば①『ピカルディー』(*La Picardie et les régions voisines, Artois-Cambrésis-Beauvaisis*. Librairie Guénégaud, 1973, 496 p. [texte original : 1905]), ②『ヨーロッパの衰退』(*Le déclin de l'Europe*. Librairie Guénégaud, 1975, 373 p. [texte original : 1920]), ③『大英帝国』(*L'Empire britannique, étude de géographie coloniale*. A. Colin, 1923, 280 p.)などに見られる彼のアクチュアルな問題に関心を示してきた面、ダイナミックな面にはほとんどふれられていない。
- 7) Febvre, L. : Deux amis des Annales : Jules Sion, Albert Demangeon. *Annales d'histoire sociale*, 3, 1941, pp. 81-89.
- 8) Sion, J. : *Les paysans de la Normandie orientale : Pays de Caux, Bray, Vexin normand, Vallée de la Seine, étude géographique*. Gérard Monfort, 1981, 544p. (texte original : 1909) .
- 9) Sion, J. : *Le Var supérieur, étude de géographie physique*. A. Colin, 1909, 96p.
- 10) Marres, P. : Jules Sion (1879-1940). *B. S. L. G.*, 11, 1940, pp. 1-15.
- 11) 第2回全国大学総合地理学巡検の報告記事はシオンが書いている。Sion, J. : La seconde excursion géographique interuniversitaire (de la Méditerranée aux Cévennes et aux Causses, juin, 1906), *Ann. de Géogr.*, 15, 1906, pp. 376-379.
- 12) Zimmermann, M. : L'Italie et les pays balkaniques d'après Jules Sion et Y. Chataigneau. *Ann. de Géogr.*, 44, 1935, pp. 620-626.
- 13) *op. cit.* (10) : pp. 10-11.
- 14) *op. cit.* (7) : p. 89.
- 15) この中には『地理学年報』に多数寄稿された『資料』(*Chronique géographique*)は含まれていない。
- 16) アンリについてはBerdoulay, V. : Louis-Auguste Himly (1823-1906). *Geographers. Biobibliographical Studies*. 1, 1977, pp. 43-47. に詳しく紹介されている。
- 17) フランス地理学派成立期の事情については以下の文献に詳しい。なおヴィタリアン第1世代の規定は必ずしも容易ではないが、ここでは一応、ヴィダルの弟子たちのうちで彼の指導の下に学位論文を書いた人たちの世代、ならびにリュシアン・ガロアとする。Andrews, H. F. : The Durkheimians and human geography : some contextual problems in the sociology of knowledge. *T. I. B. G.*, 9, 1984, pp. 315-336. ; Berdoulay, V. : *La formation de l'école française de géographie (1870-1914)*. Bibliothèque Nationale, 1981, 245p. ; Claval, P. : *Géographie humaine et économique contemporaine*. PUF, 1984, 442p. ; Meynier, A. : *op. cit.* (1) ; 野澤秀樹「フランス地理学派成立期の地域研究。一とくにペイ(pays)の研究について」。中村和郎・岩田修二編『地誌学を考える』古今書院, 1986, pp. 16-35.
- 18) *op. cit.* (6) -①
- 19) Blanchard, R. : *La Flandre, étude géographique de la plaine flamande en France, Belgique et Hollande*. Imprimerie L. Danel, 1906, 530p.
- 20) *op. cit.* (8) .
- 21) 松田信の一連の研究および野澤秀樹 : *op. cit.* (17) を参照されたい。
- 22) 1909年以前の段階でもっともよくこの考え方が現われているものは、恐らく次の論文であろう。Vidal de la Blache, P. : Les pays de France. *La Réforme Sociale*, 48, 1904, pp. 333-344.
- 23) アンドレ・ショレー(山本正三・正井泰夫・田中真吾共訳編)『地理学的方法論的考察』大明堂, 1967, 170p. また松田信「ショレーの『人文地理学』」

- 三重大学学芸学部紀要, 20, 1958, pp. 154-162.
を参照されたい。
- 24) Brunet, R. : *Les phénomènes de discontinuité en géographie*. CNRS, 1968, 111p.; *Id.* : Le quartier rural, structure régionale. *R. G. P. S. O.*, 40, 1969, pp. 81-100.; *Id.* : Pour une théorie de la géographie régionale. in *Pensée géographique française contemporaine*. PUB, 1972, pp. 649-662. ブリュネの基本的な考え方については青木伸好『地域概念。—都市と農村の関係において—』大明堂, 1985, 342 p. とくにpp. 28-38に詳しく紹介されている。
- 25) Pinchemel, Ph. : Paul Vidal de la Blache (1845-1918). in *Les géographes français*, Bibliothèque Nationale, 1975, pp. 9-23.
- 26) Sion, J. : Le Tibet méridional et l'expédition anglaise à Lhassa. *Ann. de Géogr.*, 16, 1907, pp. 31-45.
- 27) Sion, J. : Les pluies de l'Indochine. *Ann. de Géogr.*, 21, 1912, pp. 462-464.
- 28) Sion, J. : *L'Asie des moussons. (I. Chine- Japon ; II. Inde- Indochine- Insulinde)*. in Vidal de la Blache, P. & Gallois, L. (dir.) : *Géographie Universelle*, tome 9, A. Colin, 1928-29, 2vols. 548 p.
- 29) *op. cit.* (10) : pp. 5-6.
- 30) たとえば, Gallais, J. : L'évolution de la pensée géographique de Pierre Gourou sur les pays tropicaux. (1935-1970). *Ann. de Géogr.*, 90, 1981, pp. 129-150.
- 31) *Ibid.* ならびに Harrison Church, J. : The case for colonial geography. *T. I. B. G.*, 1948, 14, pp. 17-25.
- 32) Gourou, P. : *Terres de bonne espérance, le monde tropical*. Plon, 1982, 457p.; Lévi- Strauss, Cl. : *Race et histoire*. 1952. (荒川幾男訳『人種と歴史』みすず書房, 1970, 116p.). なおグルーの地理思想については拙稿「地理学と文明 —ピエール・グルーの地理学観—」. 金沢大学文学部地理学報告, 1, 1984, pp. 89-113. を参照されたい。
- 33) *op. cit.* (28) : p. 525.
- 34) *Ibid.*
- 35) *Ibid.*
- 36) *Ibid.*, p. 526.
- 37) *Ibid.*
- 38) *Ibid.*
- 39) *op. cit.* (7) : p. 81.
- 40) Sion, J. : *La France méditerranéenne*, A. Colin, 1934, 222p.
- 41) Sion, J., Sorre, M. & Chataigneau, Y. : *Méditerranée. Peninsules méditerranéennes*. in Vidal de la Blache, P. & Gallois, L. (dir.) : *Géographie Universelle*, tome 7, A. Colin, 1934, 2vols., 579p.
- 42) Sion, J. : Jean Brunhes. *Rivista Geografica Italiana*, 37, 1930, pp. 129-132.
- 43) たとえば, Sion, J. : ①La conquête du sol et le reboisement en Italie. *B. S. L. G.*, 1, 1930, pp. 31-40.; ②Les articulations littorales en Méditerranée. *Ann. de Géogr.*, 43, 1934, pp. 372-379.; ③Conditions de la navigation dans la Méditerranée antique. *B. S. L. G.*, 8, 1937 pp. 57-72.; ④Sur les thalassocraties antiques de la Méditerranée : Etude de géographie historique. *Revue de Synthèse*, 13, 1937, pp. 165-179.
- 44) たとえば, Sion, J. : ①Une histoire rurale de la France. *Revue de Synthèse*, 3, 1932, pp. 25-37.; ②Bases géographiques de la vie sociale. *Annales sociologiques*, 1, 1937, pp. 71-79.; ③Sur la structure agraire de la France méditerranéenne. *B. S. L. G.*, 8, 1937. pp. 109-131. et (avec Dion, R.) 9, 1938, pp. 1-12.
- 45) Sion, J. : Sur la civilisation agraire méditerranéenne. Oeuvres posthumes de Jules Sion. *B. S.*

- L. G., 11, 1940 pp. 16-41.
- 46) 野澤秀樹「フランス地理学とアナール学派」. 史淵, 122, 1985, pp. 203-232.
- 47) Febvre, L. : *La terre et l'évolution humaine : Introduction géographique à l'histoire*. 1922, (飯塚浩二・田辺裕訳『大地と人類の進化』上・下, 岩波文庫, 1971, 1972, 307p. +314p.) .
- 48) *op. cit.* (43) -④ : p. 165.
- 49) この引用は, *op. cit.* (7) : p. 82. による.
- 50) Berdoulay, V. : *op. cit.* (17) , p. 177.
- 51) *op. cit.* (7) : pp. 83-84.
- 52) 野澤秀樹「デュルケム派社会(形態)学と人文地理学」. 史淵, 117, 1980, pp. 189-220. ; Berdoulay, V. : *op. cit.* (17) .
- 53) Sion, J. : La seconde édition de la Politische Geographie de Mr. Fr. Ratzel. *Ann. de Géogr.*, 13, 1904, pp. 171-173.
- 54) Sion, J. : L'art de la description chez Vidal de la Blache. in Pinchemel, Ph., Robic, M. - C., Tissier, J. - L. (ed.) : *Deux siècles de géographie française. - choix de textes-* . La Documentation Française, 1984, pp. 83-87. (texte original : 1934) .
- 55) Sion, J. : Géographie et ethnologie. *Ann. de Géogr.*, 46, 1937, pp. 449-464.
- 56) *op. cit.* (44) -②.
- 57) *op. cit.* (53) : p. 171.
- 58) *Ibid.* p. 172.
- 59) *Ibid.* p. 173.
- 60) *Ibid.* p. 172.
- 61) Woeikof, A. : La géographie de l'alimentation humaine. *La Géographie*, 20, 1909, pp. 225-240 ; pp. 281-296.
- 62) *op. cit.* (55) : p. 460.
- 63) *Ibid.* p. 464.
- 64) *op. cit.* (53) : p. 172.
- 65) *op. cit.* (44) -② : p. 71.
- 66) *Ibid.* p. 79.
- 67) *op. cit.* (42) : pp. 131-132.
- 68) *op. cit.* (8) : pp. VII-VIII.
- 69) *op. cit.* (43) -② : p. 375, p. 379.
- 70) *op. cit.* (54) : p. 84.
- 71) Sion, J. : La Macédoine d'après le livre Mr. Jacques Ancel. *Ann. de Géogr.*, 41, 1932, p. 307.
- 72) *op. cit.* (41) : p. 238.
- 73) *op. cit.* (43) -② : p. 379.
- 74) *op. cit.* (41) : p. 264.
- 75) *Ibid.* p. 36.
- 76) *Ibid.* p. 264.
- 77) *Ibid.* p. 238.
- 78) *Ibid.* p. 264.
- 79) *op. cit.* (40) : p. 204.
- 80) *op. cit.* (41) : pp. 55-56.
- 81) *op. cit.* (45) : p. 35.
- 82) *op. cit.* (55) : p. 460.
- 83) *Ibid.*
- 84) *Ibid.* pp. 460-461.
- 85) *Ibid.* p. 461.
- 86) *Ibid.*
- 87) *Ibid.* p. 463.
- 88) *Ibid.* p. 460.
- 89) *op. cit.* (40) : pp. 140-141.
- 90) *op. cit.* (41) : p. 247.
- 91) *op. cit.* (28) : p. 514.
- 92) Sion, J. : Le Thanh-Hoa. *Ann. de Géogr.*, 38, 1929, p. 516.
- 93) 松田信「地理的複合体概念の展開」. 人文地理, 23, 1971, pp. 74-90.
- 94) Buttimer, A. : Réflexions sur la géographie sociale. *Bul. Soc. Géogr. de Liège*, 1967. no. 3, pp. 27-49.
- 95) *op. cit.* (4) : pp. 91-92, p. 172.
- 96) Brunhes, J. : Du caractère propre et du carac-

tère complexe des faits de géographie humaine. *Ann. de Géogr.*, 22, 1913, p. 30.

97) もっともこのブリューヌに対する飯塚浩二以来の批判が、本当に正しい審判であったかどうか、また彼を簡単に心理相対主義者として切り捨ててしまっ
てよいのかどうかの検討の余地があろう。いずれに
せよ、心理的要素の介在を彼の地理学体系の中で正
しく位置づけて再検討する必要があるだろう。この
点については橋本征治の秀れたブリューヌ研究を参
照されたい。橋本征治「ブリューヌの人文地理学体
系と方法。ーブラーシュとの比較による批判と展
望ー」史泉, 1971, pp. 1-25.

なおシオンのブリューヌ評価は両義的である。上
で引用した如く (op. cit. [67]), 他の同時代人と
同様に、基本的にはブリューヌを体系主義者、物質
主義者とみなしており、かなり批判的である。がし
かし、ブリューヌが体系や物質的側面を強調するに
もかわらず、心理的民族的ファクターを持ち出し
てきており、この点で彼の説とは矛盾している。け
れどもこの矛盾を生み出している心理的民族的ファ
クターを重視する姿勢には、傾聴すべき見解も少な
くないとして評価している。したがってシオンの立
場はソルボンヌ的なブリューヌ全面否定の立場とは
異なっている。

98) *op. cit.* (8) : pp. 311-312.

99) *op. cit.* (10) : p. 2. の引用文による。

100) *op. cit.* (44) -② : p. 78.

101) *op. cit.* (55) : p. 461.

102) Berdoulay, V. : *op. cit.* (17). ; Meynier, A. :
op. cit. (1) .

103) BOUTROUX, E. : *De la contingence des lois de
la nature*. 1874, (野田又夫訳『自然法則の偶然性』
創元社, 1945, 336p.).

104) *op. cit.* (5) -①.

105) Demangeon, A. : La géographie psychologi-
que. *Ann. de Géogr.* 49, 1940 pp. 134-137.

106) *op. cit.* (42) : p. 132.

107) *op. cit.* (54) : p. 87.

108) Wrigley, E. A. : Changes in the philosophy
of geography. in Chorley, R. J. & Haggett, P.
(ed.) *Frontiers in geographical teaching*, Methuen,
1965, pp. 3-20.

109) *op. cit.* (32) .

110) de Planhol, X. : *Le monde islamique. Essai
de géographie religieuse*. PUF, 1957, 146p. ; Id. :
*Les fondements géographiques de l'histoire de
l'Islam*. Flammarion, 1968, 442p.

111) Berque, A. : *Le Japon, gestion de l'espace et
changement social*. Flammarion, 1976, 344p. ; Id. :
Vivre l'espace au Japon. 1982, (宮原信訳『空間の
日本文化』筑摩書房, 1985, 291p.) .

112) Vidal de la Blache, P. : *Principes de géographie
humaine*. 1922, (飯塚浩二訳『人文地理学原理』
上・下, 岩波文庫, 1940, 276p. +290p.) .

113) *op. cit.* (4) : p. 171.

114) *op. cit.* (25) : pp. 20-21 ; また *op. cit.* (4) :
pp. 170-172 ; Berdoulay, V. : *op. cit.* (17) : p.
191. も参照されたい。

115) *op. cit.* (112) : とくに第2篇第6章『文明の
進化』. 下, pp. 91-117.

116) Le Lannou, M. : *La géographie humaine*.
Flammarion, 1949, pp. 147-151.

117) *op. cit.* (28) : p. 207.

118) オーギュスタン・ベルク (米田巖訳) 「フランス
の日本地理研究」. 石田寛編『外国人による日本地
域研究の軌跡』古今書院, 1985, p. 172.

119) *op. cit.* (44) -② : p. 78, p. 79.

120) 拙稿「今世紀初頭以降のフランスにおける都市
網, 都市=農村関係研究の展開. ー国家博士論文の
分析を中心にー」. 西村睦男・森川洋編『中心地研
究の展開』大明堂, 1986, pp. 45-77.

121) また野澤秀樹 : *op. cit.* (17) でもシオンの学位

- 論文についてふれられているので、参照されたい。
- 122) Bloch, M. : *La Société féodale. I. La formation des liens de dépendance*. 1939, (新村猛他共訳『封建社会, I』みすず書房, 1973, 260p.) .
- 123) *op. cit.* (8) : p. 12.
- 124) *Ibid.*
- 125) 野澤秀樹「最近のフランスにおける地理学研究。ー都市＝農村関係, 都市網による地域研究の方法」. 人文地理, 19, 1967, pp. 289-305. ; 青木伸好 : *op. cit.* (24) ; 拙稿 : *op. cit.* (120) .
- 126) *op. cit.* (8) : p. 259.
- 127) *Ibid.* p. 402.
- 128) *op. cit.* (40) : pp. 172-173.
- 129) Derruau, M. ; *Précis de géographie humaine*. A. Colin, 1961, pp. 11-12. ; Frémont, A. : La Région d'Alençon, géographie régionale et épistémologie. *A. C. R. R. D. P. C.*, no. 11, 1975, pp. 5-15.
- 130) Brunet, R. *Les campagnes toulousaines, étude géographique*. Pub. Fac. Let. Sci. H. de Toulouse, 1965, pp. 7-8.
- 131) Vidal de la Blache, P. : Les paysans de la Normandie orientale par Jules Sion. *Ann. de Géogr.*, 18, 1909, p. 177.
- 132) Vidal de la Blache, P. : La plaine picarde par A. Demangeon. *Ann. de Géogr.*, 14, 1905, p. 269.
- 133) Frémont, A. : *op. cit.* (129) , pp. 10-11.
- 134) *op. cit.* (8) : pp. 456-457.
- 135) *Ibid.* pp. 312-317.
- 136) *op. cit.* (28) . この種の言及は本書の随所にみられる。たとえば p. 226, pp. 516-518.
- 137) まとまった叙述としては *op. cit.* (41) : pp. 374-376.
- 138) Sion, J. : En Thessalie. *La Géographie*, 61, 1934, pp. 1-16.
- 139) *op. cit.* (8) : p. 457.
- 140) Deffontaines, P. : *Les hommes et leurs travaux dans les pays de la Moyenne Garonne (Agenais, Bas-Quercy)*. Librairie Quessiveur, 1978, 462p. (texte original : 1932) .
- 141) Hérin, R. : Aux origines de la géographie sociale. in Frémont, A., Chevalier, J., Hérin, R., Renard, J. : *Géographie sociale*. Masson, 1984, pp. 11-42.
- 142) Rochefort, R. : Géographie sociale et sciences humaines. *B. A. G. F.*, no. 314-315, 1963, p. 20, p. 21. また社会地理学に関する彼女の基本的考え方については, *Id.* : Géographie sociale et environnement. in *Pensée géographique française contemporaine*. PUB, 1972, pp. 396-405.
- 143) 拙稿「モーリス・ルラヌー再考」. 水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』大明堂, 1986, pp. 39-49.
- 144) Vant, A., : La géographie sociale lyonnaise en perspective. *R. G. L.*, 59, 1984, pp. 131-146.
- 145) *op. cit.* (6) .
- 146) たとえば, Crémieux, B. : *Inquiétude et la reconstruction*. 1931, (増田篤夫訳『不安と再建』小山書店, 1951, 277p.) .
- 147) *op. cit.* (46) .
- 148) Le Lannou, M. : *Pâtres et paysans de la Sardaigne*. Arrault, 1941, 364p. ; *Id.* : L'histoire géographique de la Méditerranée. *Annales du Centre universitaire méditerranéen*, 19, 1965-1966, pp. 151-161. また彼はロシュフォール女史, ペルティエ (Pelletier, J.), ベトモン (Bethemont, J.), シヴィニョン (Sivignon, M.), プロスト (Prost, B.), ルヌッチ (Renucci, J.) など多くの地中海地域の研究者を育てている。
- 149) 拙稿 : *op. cit.* (32) .
- 150) Musset, R. : *Le Bas-Maine, étude géographique*. A. Colin, 1917, 496p.
- 151) *op. cit.* (140) .

- 152) Marres, P. : *Les Grands Causses, étude de géographie physique et humaine*. Tome II, *Le labour humain*. Arrault, 1935, 445p.
- 153) Gottmann, J. : De la méthode d'analyse en géographie humaine. *Ann. de Géogr.* 1947, pp. 1-12.
- 154) *Ibid.* p. 12.
- 155) 拙稿 : *op. cit.* (32) および *op. cit.* (143) .
- 156) Rochefort, R. : *Le travail en Sicile, étude de géographie sociale*. PUF, 1961, 363p.
- 157) Frémont, A. : *L'élevage en Normandie, étude géographique*. Pub. Fac. Let. Sci. H. Univ. Caen, 1968, 1967, 2vols., 626p. + 316p.
- 158) Gallais, J. : *Le delta intérieur du Niger, étude de géographie régionale*. IFAN, 1967, 2vols., 621p.
- 159) Norberg-Schulz, Ch. : *Genius loci, Towards a phenomenology of architecture*. Rizzoli, 1980, 213 p. (texte original : 1979) .
- 160) Lawrence, D. H. : The spirit of place. in *Studies in Classical American Literature*. 1922, (金関寿夫訳「土地の精神」, 『世界批評大系 5, 小説の冒険』筑摩書房, 1974, pp. 197-204.) .
- 161) Dubos, R. : *A God Within. A positive philosophy for a more complete fulfillment of human potentials*. 1972, (長野敬・新村睦美共訳『内なる神。人間・風土・文化』蒼樹書房, 1974, 268 p.) .
- 162) Poulet, G. : *L'espace proustien*. 1963, (山路昭・小副川明訳『ブルースト的空間』国文社, 1975, 178 p.) .

RELIRE LA PENSÉE GÉOGRAPHIQUE DE JULES SION

Takahiko NISHIMURA

Jules Sion (1879-1940) est un géographe représentatif de l'école géographique française de la première moitié du siècle et de renom international. Mais curieusement, Sion, en sa personne et dans son œuvre, n'a pas été l'objet d'analyses nombreuses et approfondies, sauf les pages d'A. Buttimer et de P. Claval. C'est peut-être parce qu'il n'a écrit aucun livre : *Traité de géographie humaine* ou *Principes de géographie humaine*, par exemple. Au travers de la présentation de sa vie et son activité scientifique, cet article se propose de dégager les traits caractéristiques de sa géographie en rapport de la géographie contemporaine.

A relire les écrits de Sion, on y trouve le contenu

abondant qui se lie à la géographie contemporaine. Sans doute a-t-il toujours essayé de révéler la personnalité de chacune région qu'il a étudiée comme la plupart de ses contemporains. Mais, pour cela, il a eu le sentiment qu'il a fallu aller plus loin au-delà du cadre de l'analyse matérialiste des genres de vie comme ceux-ci l'ont fait ; il s'est enhardi à élargir la conception vidalienne et y introduire de nouveaux éléments. Dans le schéma global d'explication, d'une part, Sion a toujours analysé à la fois les liaisons verticales des complexes géographiques, et leurs liaisons horizontales auxquelles les géographes français ont attaché assez peu d'importance à cette époque-là, et d'autre part, il a tenu compte à la fois des

éléments objectifs des réalités sociales, et de leurs éléments subjectifs qu'ils ont hésité à traiter. Et d'ailleurs ce savant n'a pas cessé de les étudier du point de vue de l'histoire universelle : la conception de sa géographie serait beaucoup plus grandiose qu'on le croit.

Il y aurait de trois orientations dans sa géographie, en considérant sous l'angle de la géographie contemporaine : 1). la géographie des rapports ville/campagne ; 2). la géographie sociale ; 3). la géographie de la civilisation.

1). Il insiste toujours sur le rôle et les sens des villes dans la vie rurale. Dans sa thèse sur les paysans de la Normandie orientale, par exemple, il comprend cette région non seulement comme "un ensemble organique de régions naturelles", mais encore par rapport à Paris, à Rouen, au Havre, soit dans l'aspect des propriétés foncières, soit dans celui des industries rurales, soit dans celui des migrations des populations rurales. Il met l'accent sur le fait qu'il est difficile de saisir la Normandie depuis le 18^e siècle au moins sans prendre en considération les divers comportements et les poids de la bourgeoisie urbaine, parce que la vie rurale est rythmée par elle. On peut le situer en tant qu'un des précurseurs des études des rapports ville/campagne comme Dugrand, R. Brunet ont fait aux années 50-60.

2). Quant à la géographie sociale, Sion mérite d'être remarqué. La plupart de ses contemporains considérait souvent les sociétés comme un tout et négligeait les différences sociales à l'intérieur des cellules territoriales, tandis que les productions et les techniques agricoles ou industrielles, les formes d'habitat et de maison étaient suffisamment étudiées dans beaucoup de

monographies régionales. Par contre, il se trouve que Sion analysait les structures socio- professionnelles beaucoup plus minutieusement qu'eux, quand on lit attentivement sa thèse ou son ouvrage sur l'Italie, par exemple. C'est sa vue qu'il jette avec sympathie sur les classes populaires forcées de mener une vie misérable qui est particulièrement remarquable. En effet, les divers milieux de vie des petites gens sont fréquemment décrits dans ses œuvres : tantôt en entrant dans leur vie alimentaire, il explique la douleur de la vie des ouvriers agricoles ; tantôt il mentionne l'idéal modeste des paysans d'une région indienne. Si on définit la géographie sociale, avec R. Rochefort, comme champ d'études accordant de "l'importance au groupe humain d'abord, à l'espace ensuite" et s'interrogeant "sur la manière dont les gens se sentent dans l'espace", c'est certain qu'il est un pionnier de géographie sociale.

3). Cependant, le thème essentiel de sa géographie, ce serait la géographie de la civilisation; les autres orientations y seraient incluses. Pour Sion, la civilisation est ce qui règle la vie sociale d'une région par la base, qui lui donne l'orientation et la stabilité et qui modèle le paysage ; elle est ainsi l'agent fondamental et qui existe au plus profond d'organisation de l'espace. Le genre de vie n'en est qu'une manifestation concrète. Il pénétrait dans l'idée de Vidal de la Blache. Mais, plus encore que son maître, il sentait l'indépendance relative de la civilisation vis-à-vis du milieu. Il s'efforçait d'éclairer chacune région sous l'aspect de la civilisation, bien qu'il va sans dire qu'il ne soutenait pas de déterminisme de civilisation. C'est pour cela qu'il mettait de l'importance aux facteurs psychologiques et sociaux : la perception, l'attitude,

la valeur, la mentalité de chacun groupe humain.
Donc, il est un personnage qui développé la
géographie de Vidal de laquelle l'essence était aussi

la géographie de la civilisation, et ce thème est,
plus tard, retenu, élaboré et perfectionné par P.
Gourou, par X. de Planhol, par A. Berque, etc.